

伏見港の歴史

江戸時代(1603-1868)の伏見の成功に不可欠なのは、京都と大阪を結ぶ水運システムであり、そのシステム発展の鍵は、住之良了(1554-1614)という名の商人の成功にあった。彼は将軍徳川家康(1543-1616)を説得し、伏見と京都中心部の二条地区と、川下の大阪に流れ込む深く流れの速い宇治川と淀川とを結ぶ運河を建設させた。

この水路を使用して、米を伏見の醸造所に大量に持ち込み、完成した日本酒を京都、大阪などに直接流通させることができるようになった。東京の丸の内、新宿、渋谷などが日本の現代の交通ハブであるように、これらの都市の主要な港の周辺には産業が生まれた。

伏見が内陸港として発展するにつれて、主要な陸上輸送の拠点にもなった。伏見は、京都と江戸(現在の東京)を結ぶ主要道路である東海道の重要な宿場町であった。伏見は、その所在地ゆえ、首都に出入りする西日本の大名が頻繁に訪れた。幕府の参勤交代政策もとの、すべての大名は徳川の首都江戸に隔年で住む必要があった。移動する大名とその家臣が伏見の蔵元を頻繁に訪れるようになり、旅館などの宿が蔵元の周りに出現し、その需要に応えた。寺田屋旅館から川を渡った中書島には、歓楽街も栄えた。鉄道輸送の出現により、明治時代(1868~1912年)になって初めて、伏見の船積み港としての重要性は低下した。しかし、日本酒業界は拡大し、伏見は「日本酒の町」として知られるようになった。